

秋田県角間崎貝塚出土の礫石錘 —角田コレクション紹介6—

Stone Spindles in Kakumazaki Shell Mound in Akita Prefecture

吉田 泰幸 (YOSHIDA Yasuyuki)¹⁾

1) 名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程
Doctoral Course, Graduate School of Letters, Nagoya University

Abstract

Kakumazaki Shell Mound is valuable as few shell mounds in areas along the Sea of Japan. Since a long time ago, Kakumazaki shell mound has been watched, and excavated by Ichiro Mutoh, Dr. Sanesige Komaki, and Dr. Bunei Tsunoda. Many stone spindles have been unearthed in each excavation. In Tsunoda Collection, stone spindles are abundance, too. There are two theories with application of stone spindle. One is stone spindle is used for fish net, another is for knitwork. Above the difference of opinion, integration of way to measure stone spindle has been argued by Dr. Makoto Watanabe, propounder of knitwork-theory. The author measured stone spindles in conformity to that method. As a result, average weight of stone spindles in Kakumazaki Shell Mound is 168.9g, heavier than standard spindle for fish net in Jomon Period. The deviation of weight is also better for knitwork-theory.

I はじめに

名古屋大学博物館に寄贈された角田文衛博士コレクション(以下「角田コレクション」と略称)は、東北地方の縄文時代資料を中心としている。一部についてはすでに資料紹介をおこなっている¹⁾。今回紹介するのは秋田県角間崎貝塚出土の礫石錘である。

角間崎貝塚は、八郎潟の西岸、男鹿半島の寒風山周辺に発達した洪積台地上に立地し、秋田県男鹿市(旧南秋田郡若美町)に所在する(第1・2図)。本貝塚資料の一部は角田博士によってすでに『史林』第24巻第3号誌上にて報告され、出土土器の詳細な分析がなされている(角田1939)。また、角田博士の調査以前に、すでに武藤一郎氏、小牧実繁博士の調査がおこなわれており、それぞれ学術誌上に報告がなされている(武藤1922, 小牧1926a・b)。

武藤一郎氏は、角間崎貝塚を「秋田縣に於ける最初の貝塚にして然も日本海岸に於て本州最北の貝塚」(p.39)として注目していた。この時点ですでに「錘石は數個ありて前記貝塚物と同様なり。而して発掘面積の割合に錘石の多かりしは以て如何に魚貝に親しみしかを思はしめたり」(p.43)との記述がある。この「錘石」はおそらく礫石錘であろう。

小牧博士の業績は、角間崎貝塚を石器時代遺跡としてのみならず、八郎潟付近の古地形を知る上でも重要な遺跡として捉えた点が注目される。博士は小規模な発掘を2地点においておこなっており、「洪積層に属するものであろう」、「粘土層」・「均粒砂層」(小牧1926b, p.54)の上に貝塚が形成されていることを確認している。両地点に共通して出土するものとして、「蜆貝」と「錘石」を挙げている。この「錘石」は写真図版(小牧1926a, p.87の第5図)に掲載され、礫石錘と確認できる。「錘石」の

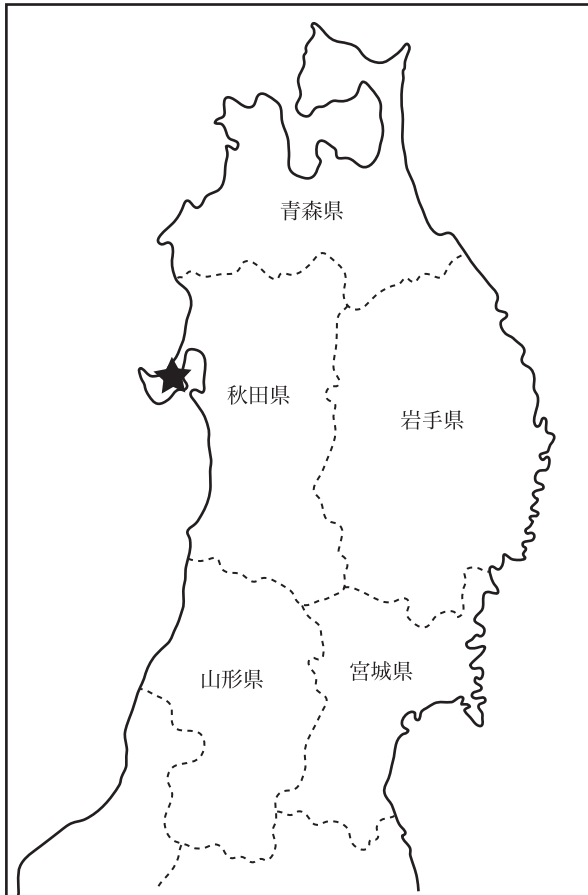


図1 角間崎貝塚 (★印) の位置



図2 角間崎貝塚 (○印) 付近地形図

出土は4点で、「斜長石石英粗面岩」、「硅質頁岩」、「凝灰岩質頁岩」と、石質についても記述があることが特筆される。その他縄文土器破片、石槍、大型石鏃、二等辺長三角形石鏃、柳葉式石鏃、石匕、石製環状石器破片が出土したとある。蜆貝の出土からすでに遺跡付近には「半淡半鹹の潟域或は入江の存した」ことを推定している。また、基盤層が砂層であることから、八郎潟一帯の砂丘地の形成が案外に古く、「少なくとも砂丘の基盤をなす砂州は形成せられて居た」(小牧 1926b, p.58) ことも推定している。そして、「錘石及び貝殻は此の水面と密不接離の関係にあるものである」(p.58) としており、武藤氏と同様に、礫石錘の機能は漁網錘と推定していることがうかがえる。

角田文衛博士の当時の関心は最古の石器時代遺跡の探索であった。報文においては土器の型式学的分析から、同じく博士の調査した赤川遺跡の赤川式 (= 円筒下層式) と共通点が多く、「並行発達せる若干の型式を包むひとつの様式」(角田 1939, p.628.) としつつ、赤川式の直前型式として本貝塚出土土器の一部を「角間崎式」と命名した。そして、角間崎貝塚を「今日さかのぼりうる最古の石器時代遺跡であると帰結される」(p.629) と評価していた。石器については定角式の石斧並びに遠州式風の石斧、石篋、石匙 (多くが縦型)、石鏃が出土したとされており、これらの写真図版が掲載されている (p.626)。そして「最も特色ある」ものとして、「扁平楕円形の長径三寸内外の川原石の相対する両端を打欠いで製作した錘石様の石器」を挙げ、「無慮八十個ほど採集しえた」とされている。また、「その用途は一概に錘石とのみ断定出来ぬ」としている (p.627)。これが本稿で紹介する礫石錘である。博士報文では礫石錘の写真図版はなく、法量なども不明であるため、それらを補完しつつ、若干の検討をおこなう。

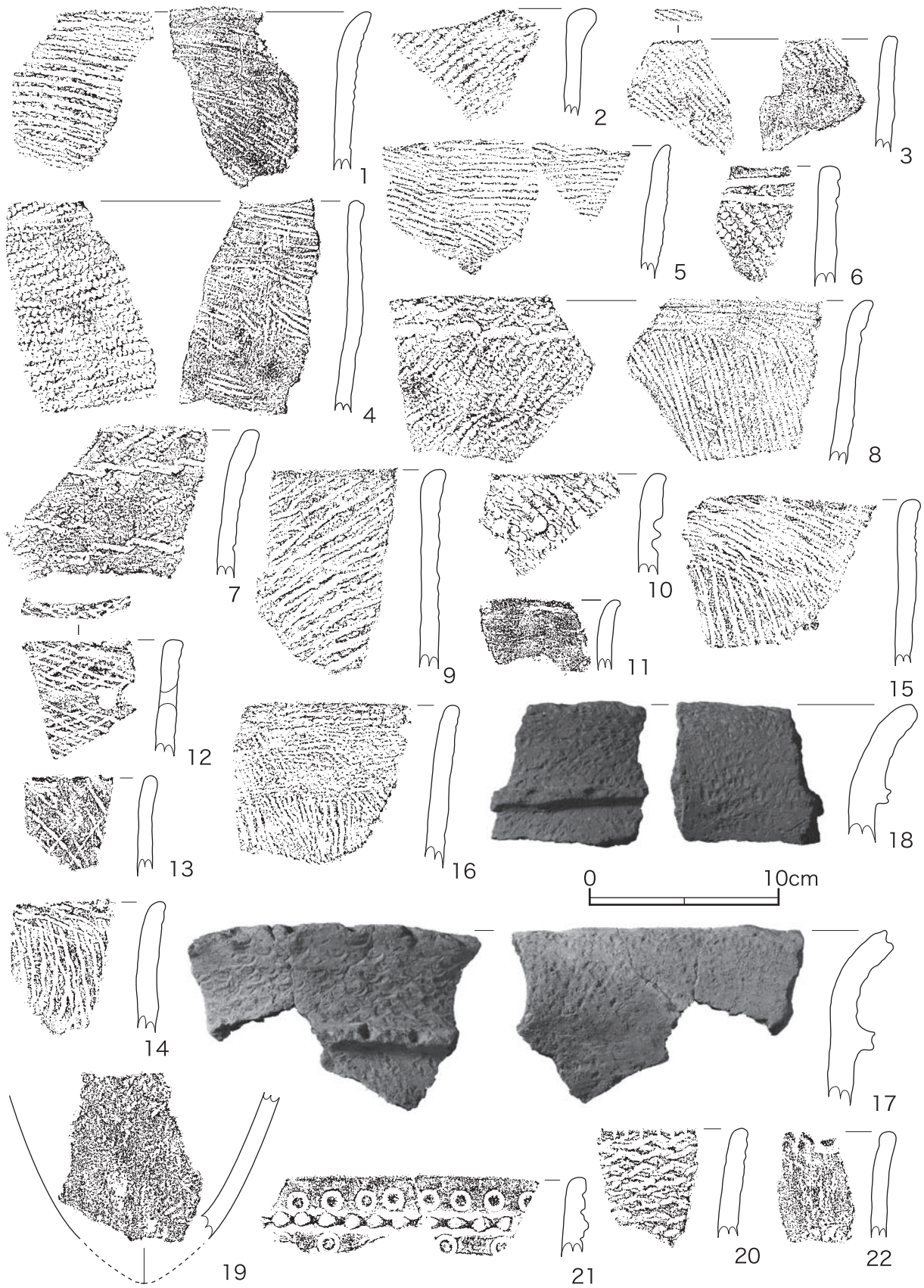


図3 角間崎貝塚出土土器片拓影（縮尺3分の1）

1～10：第1群第1類，11：同第2類，12～14：同第3類，15・16：同第4類，17・18：同第5類，19：同尖底土器片，20～22：第2群第6類。

Ⅱ 資料の概要

角田コレクションにおける本貝塚の出土資料点数は土器片 749 点、石器 86 点の計 835 点である。石器の内訳は磨石 2 点、石槍 2 点、石鏃 2 点、縦形石匙 7 点、横形石匙 2 点、礫石錘 67 点、磨製石斧 1 点、スクレイパー 2 点、不明石器 1 点であり、礫石錘の占める割合が非常に高い。

角田文衛博士の報文によれば、分層発掘の結果、地表より 8 寸を黒色表土、3 尺 2 寸までの土器の多い黒褐色土層を上層、6 尺 2 寸までの粘土質褐色土層を下層とし、特に上層からは発掘困難なほど土器片が夥しく出土したと記されている。上層からの出土資料がもっとも多かったと記されている。寄贈資料の一部には 144・5・6 という 3 種類の朱書がなされており、それぞれが黒色表土、上・下層のどれかに対応するものとも考えられる。しかし、それぞれの数字がなにを示しているかがわかる記録類はなかった。また、朱書がなされた各資料の点数も大きな差異がなくほぼ同数であり、もっとも出土資料が多かったとされる「上層」の資料を推定することもできなかった。

Ⅲ 主要土器片の検討

角田文衛博士は土器片を 2 群 6 類に分類されており、本稿においては博士報文の図版に掲載されているものを中心に図化をおこない、それぞれ代表的と考えられる資料を掲載した（第 3 図）。博士の分類は以下のようなものである。

第 1 群：繊維を豊富に含む土器群。尖底は 1 点のみであったとの記述がある。また、底面に縄文がみられるものが多少あるとの記述もなされている。次の 5 類に分類している。

第 1 類：斜行縄文を主要文様要素とする深鉢形土器（図 3 - 1 ~ 10、角田 1939 中の図版では順に 3・4・7 ~ 9・11 ~ 13・15・16、以下同じ）。複節斜行縄文が圧倒的。内面に条痕あるものは下層に多いとの記述があるが、前節に記したように、「上層」・「下層」資料を分別することは困難である。

第 2 類：素文の土器（同 11、角田 1939 では 19）。

第 3 類：撚糸文の地文をもつもの（同 12 ~ 14、角田 1939 では 21 ~ 23）。

第 4 類：頭部に横位の不整撚糸文による装飾文様帯をもち、以下に撚糸文・単節斜行縄文をもつもの（同 15・16、角田 1939 では 28・29）。これが第 1 類に次いで出土量が多かったとされている。

第 5 類：隆起帯で以て文様帯を画したもの（同 17・18、角田 1939 では 31・32）。

第 1 群にともなうものとして、尖底土器破片が 1 点ある（同 19）。

第 2 群：上層から十片ほど出土した、繊維を含まない土器。第 6 類（同 20 ~ 22、角田 1939 では 34・35・37）の 1 類のみ。

博士は第 1 群土器は「赤川式」（＝円筒下層式）に近接するものであろう、と述べている。第 5 類の隆起帯で文様帯を区画する手法は「赤川式」にみられるとしている。しかし「赤川式」は内面に条痕がなく、単節縄文が多く、文様が発達していることから「赤川式」とまったく同じではない。さらに「船入島下層」式とは内面条痕という手法で一致するところがあるが、表面の斜行縄文は「浦口式」に似る。これらから、第 1 群土器を「赤川式」と「並行発達せる若干の型式を包むひとつの様式」としつつ、赤川式の直前型式として第 1 群土器を「角間崎式」と命名した。しかし、「なお第 1 群土器には分析しえない諸要素が含まれて」おり、「これ等の問題に満足な解答を与え得ない」としている（p.628）。この時点で、研究が初期段階であることに由来する諸処の制約はあるものの、博士自らが調査した「青森県赤川遺跡」、「宮城県船入島貝塚」、「同室浜貝塚」出土土器との対比から、本貝塚出

土主要土器の編年的位置についてはみとおしが立てられていたと言える。

掲載した資料以外にも土器破片は多量であり、現在精緻をきわめている土器型式編年研究に照らし合わせて、本貝塚出土土器を詳細に検討することは本稿ではなし得ない。しかし、掲載資料にみられる付加条縄文（図3-1・9・10）、内面条痕（同1・4・8）、複節縄文（同2・4・10）等の特徴は、円筒下層式直前の「深郷田式」と言われる土器型式の内容に近いのではないかと考えられる。したがって本貝塚の主要形成時期は縄文前期初頭に比定できる。

IV 礫石錘の検討

角田博士は主体を占める石器である礫石錘について、「一概に錘石とのみ断定出来ぬ」としたが、その後の礫石錘に関する研究は「一概に漁網錘とのみ断定出来ぬ」という方向で進められている。角間崎貝塚の礫石錘に着目した武藤氏・小牧博士はそれらを貝塚周辺の水域と関係づけて漁網錘と推定していたようである。このように礫石錘を漁網錘とする説が先行し、後に編物用の錘具とする説が提出される。後者を強く主張し、上記した現在の研究の方向性を決定づけたのは渡辺誠氏である（渡辺1981）。氏が礫石錘を編物用の錘具とする根拠は次のとおりである。

- 1：粗い打ち欠きが漁網錘に適さない。
- 2：縄文時代において漁網錘であることが確実な土器片錘・切目石錘・有溝石錘と比べて、重いものが多い。
- 3：礫石錘出土遺跡の立地は水域に近いものばかりではない。
- 4：住居址内でまとまって出土することがあり、後の時代にみられる自然石利用の編物用石錘出土位置と類似している。

漁網錘とする説において、それぞれに対する反証に相当するのは以下のとおりである。

1については、礫石錘を小型曳網の石錘として使用する実験がおこなわれており、その際には礫石錘が網を切ってしまうことはなかったということである（松岡・中田・横山1977）。興味深い事例ではあるが、実験の際の条件整備等、課題は多いと考えられる。

2については、礫石錘の多様な重量に対応した多様な網漁があったという推定がなされている。一例として、重量の軽い切目石錘・有溝石錘は投網用、重い礫石錘は集約労働を必要とする地引き網用とする説がある（伊藤・篠田1982）。1とも関連するが、礫石錘を多量に出土する遺跡は縄文早期の北日本に多い。その段階で実験でなされたような船を用いた小型曳網や、労働集約的な地引き網を想定することは難しい。弥生時代以降の管状土錘でさえ、初期の段階では大型のものはなく、後にそれらが加わる。そのことが徐々に労働集約的な様相を示していると仮定すると、なおさら縄文早期から存在する重い礫石錘を漁網錘とみることには違和感を禁じ得ない。

3については、礫石錘を多く出土する遺跡が海岸部や湖沼・大川川の近くに偏っていることが強調されている（今村1999）。しかし具体的・体系的な検討例は乏しい。

4については、礫石錘一括出土の総重量と、漁網錘であることが確実な管状土錘（弥生時代以降）一括出土の総重量を比較し、漁網錘としての可能性を強調する説がある（中尾2002）。しかし礫石錘の一括出土「数」で漁網錘として機能するかどうかは疑問である。

この問題の解決には、両説に関わる漁業史、ならびに編組製品に関わる技術史の体系的な研究が進展することが必要である。本稿においては、個々の論点に関わる基礎的データの提示に重点をおくこととする。

本貝塚の立地は「はじめに」で述べたとおりである。小牧博士によって古環境復元の端緒が開かれ

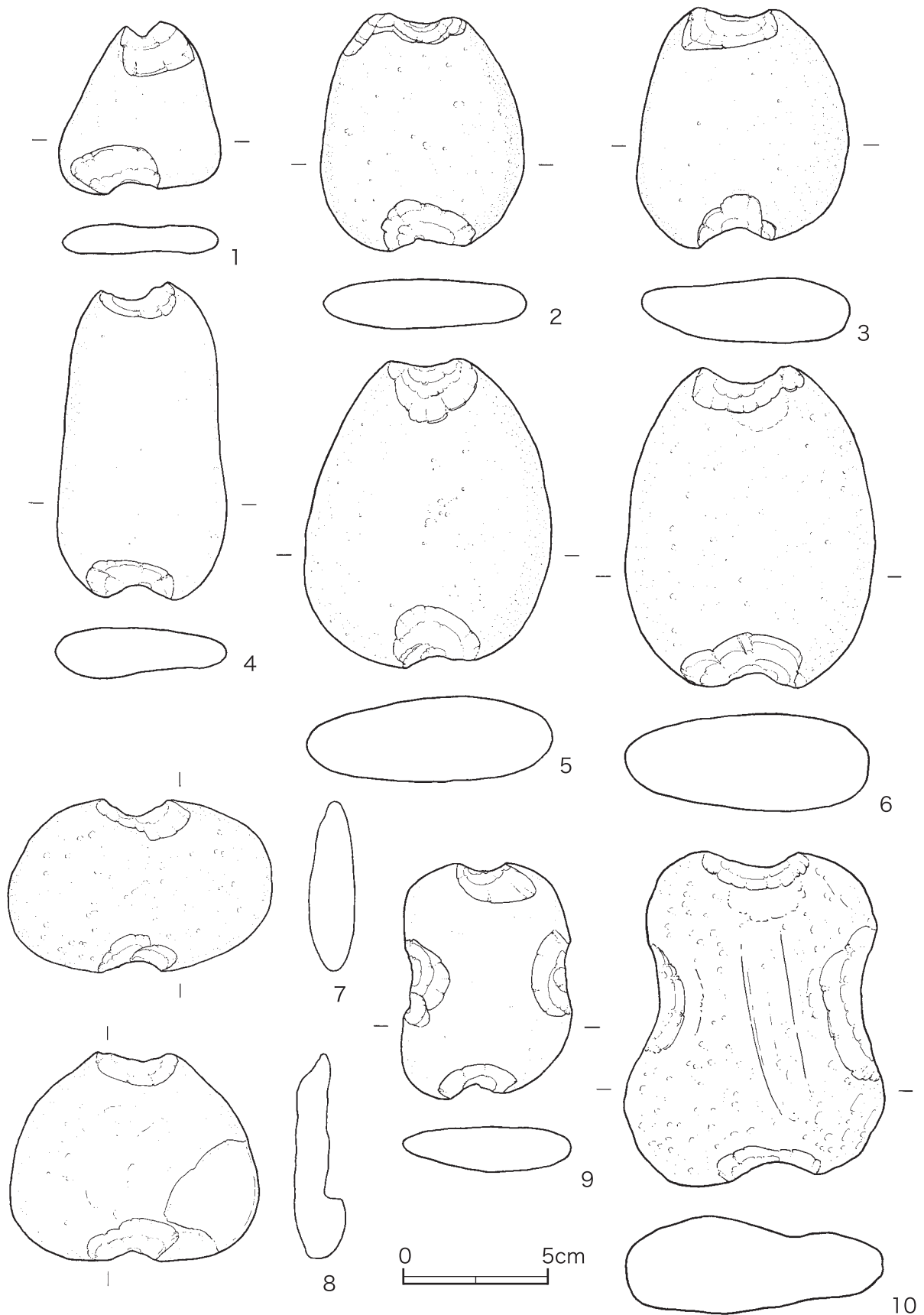


図4 角間崎貝塚出土礫石錘実測図 (縮尺2分の1)
1~6: I類, 7・8: II類, 9・10: III類.

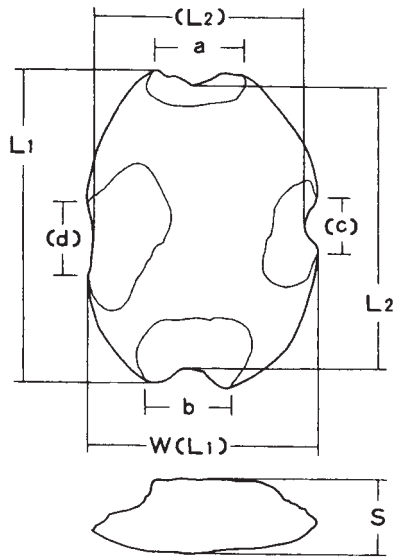


図5 礫石錘計測部位説明図（渡辺編 1985 より）

礫石錘を漁網錘とせず編み物用錘具とする立場からの数値の記載部位は、左図の9カ所と重量(W)である。まず長軸方向を上下に置くことは、上下打ち欠きの形態がもっとも多いこと、後者の立場からくることであるが、前者の立場でも長さ(L1)と巾(W)の測定は同じである。しかし後者の立場からは、厚み(S)の差による重心のかかる部位を下にすることを原則とする。そして糸または紐をまく部位ということで、打ち欠き間の最短距離(L2)を測定する。後者の見解からの必然として、糸をまく部分としての打ち欠き部分の中が問題になる。粗く打ち欠いたままにしておくことの必然性は、後者の見解からは無理なく説明できることになる。前者の見解をとる場合、これらの計測場所を省略して活用できることはあっても、逆は不可能である。したがって見解の差異を越えて、計測方式の統一を提唱したい。(渡辺 誠)

ており、今後の進展に期待するのみである。貝塚形成時期は、主要土器片の詳細な型式学的検討は今後の課題であるものの、おおよそ縄文前期初頭と考えられる。貝塚立地条件からうかがわれる客観的環境と、出土土器片からうかがわれる文化史的位相という周辺情報は、現段階ではこれ以上求めるべくもない。したがって本稿で最も重視されるべきは礫石錘の形態分類・重量をはじめとした計測値の提示である。

角田コレクションにおける本貝塚出土の礫石錘は67点である。石質は安山岩が多く、凝灰岩がそれに次ぐ。これらは打ち欠きのみられる箇所によって、次の3類に分けられる。

- I類：礫の長軸を打ち欠いたもの（図4-1～6）。
- II類：礫の短軸を打ち欠いたもの（同7・8）。
- III類：礫の長・短軸を共に打ち欠いたもの（同9・10）。

各形態の点数はI類が60点、II類3点、III類4点である。約90%がI類で占められている。礫石錘の計測位置・方法については、編み物用の錘具説を積極的に展開してきた渡辺誠氏によって図5のような提唱がなされている。本稿もそれにならって計測をおこなった（表1）。II・III類は例数も少ないため、各計測値を比較検討するには適していない構成であるが、重量に関しては若干の検討を試みたい。

礫石錘を編み物用錘具とみた場合、重要なのはその重量である。民具にみられるもじり編み製品は、その形態・サイズ・材質に応じて、もじり編みをおこなう際のタテ糸の間隔が規制される。それに伴い、錘具の形態・サイズ・重量・個数も変化する。対象製品は以下の4群に分類され、錘具の重量も特徴的な分布を示している。

- 第1群：タテ糸の間隔は1cm前後。対象製品は編布、目の細かいハバキなど。錘具の重量は20～80g。
- 第2群：間隔が2～数cm前後。対象製品は目の粗いハバキ、腰カゴ、背負いカゴ、紙漉きの簾、各種スノコなど。80～250g。
- 第3群：間隔が10～20cm前後。対象製品は米俵、炭俵。各種のコモ、ミノ、ウケなど。110～470g。
- 第4群：間隔が15～30cm前後。対象製品は雪囲い簾、エリなどの大型品。360～880g。

表1 角間崎貝塚出土礫石錘一覧表（計測部位は図4参照，単位はcm・g，カッコは現存値，石質欄で●のついたものは鈴木和博氏鑑定，無印はそれをもとに筆者鑑定）

形態	遺存状態	石質	L1	L2	W	S	a	b	重量 (g)	挿図番号
I	完形	石英安山岩●	7.1	6.5	5.7	2.3	2.2	1.9	123.2	
I	完形	砂岩●	7.4	6.5	6.7	2.2	2.4	2.0	142.6	
I	完形	安山岩●	8.2	7.4	6.9	1.7	2.4	2.5	143.3	図4-2
I	完形	凝灰岩●	8.5	8.0	6.5	1.8	2.1	1.6	120.0	
I	完形	頁岩●	8.8	7.4	9.2	3.1	3.2	3.2	359.2	
I	完形	凝灰岩	6.3	5.8	5.8	1.8	1.8	1.9	70.7	
I	完形	安山岩	8.2	7.3	6.9	2.0	2.6	2.6	148.2	
I	完形	凝灰質砂岩●	7.9	7.4	6.3	2.1	1.6	1.9	128.5	
I	完形	砂岩	8.1	7.3	7.2	2.2	2.4	2.3	164.4	図4-3
I	完形	凝灰質頁岩●	8.5	7.8	6.8	2.2	3.2	2.6	180.2	
I	完形	流紋岩	8.6	7.7	6.4	1.6	3.3	3.3	96.6	
I	完形	凝灰岩	5.8	4.9	5.5	1.0	1.2	1.6	42.9	図4-1
I	完形	安山岩	9.3	8.5	6.0	1.6	2.0	2.0	113.6	
I	完形	安山岩●	6.4	6.0	5.8	1.8	2.3	2.1	97.1	
I	完形	安山岩	9.0	8.5	5.8	1.8	1.5	1.4	130.6	
I	完形	砂岩	10.5	10.0	8.3	2.9	2.1	2.4	390.8	図4-5
I	完形	安山岩	9.9	9.1	7.5	2.1	2.4	3.0	206.4	
I	完形	安山岩	7.1	6.5	6.5	1.9	2.0	1.7	88.7	
I	完形	安山岩	8.2	7.7	7.0	2.4	3.8	2.5	179.2	
I	完形	安山岩	8.9	7.7	6.8	2.5	2.1	2.9	162.4	
I	完形	安山岩	8.0	7.7	6.6	1.6	1.5	-	111.5	
I	ほぼ完形	安山岩	10.2	8.9	(8.8)	2.5	2.4	2.2	363.6	
I	1/2	凝灰質頁岩	(7.0)	-	(7.5)	(2.4)	2.0	-	(106.5)	
I	1/2	凝灰岩	(6.0)	-	(8.3)	(3.1)	2.2	-	(186.9)	
I	1/2	砂岩	(6.8)	-	(7.6)	(2.6)	2.5	-	(133.9)	
I	1/2	凝灰岩	(6.5)	-	(7.9)	1.8	2.5	-	(117.2)	
I	完形	頁岩	8.6	8.3	6.7	1.6	1.9	1.9	131.1	
I	完形	流紋岩●	8.7	7.7	7.2	2.8	2.4	2.4	154.0	
I	完形	砂岩	7.7	7.0	6.3	2.9	1.5	1.7	144.1	
I	完形	安山岩	7.9	6.9	6.6	1.3	1.8	2.5	98.9	
I	完形	安山岩	10.4	9.7	7.2	2.4	2.2	2.1	238.2	
I	完形	安山岩	8.5	7.8	8.7	2.2	3.0	2.4	246.2	
I	完形	安山岩	8.3	7.7	6.9	1.9	1.7	1.7	167.9	
I	完形	砂岩●	8.6	7.8	7.2	2.5	2.4	3.0	204.7	
I	完形	安山岩	10.0	9.5	7.1	2.3	2.7	2.4	217.5	
I	完形	安山岩	7.7	7.3	5.4	2.3	1.8	2.0	113.9	
I	完形	安山岩	5.7	5.3	5.4	1.5	1.1	1.6	68.2	
I	ほぼ完形	安山岩	7.0	6.5	5.6	1.5	1.6	-	73.3	
I	ほぼ完形	流紋岩	7.5	6.2	6.5	1.3	0.4	1.9	53.6	
I	完形	安山岩	8.5	7.0	8.2	2.2	2.2	4.0	219.4	
I	完形	安山岩	8.2	7.4	7.0	1.5	1.4	2.0	125.6	
I	完形	安山岩	10.5	9.2	9.8	1.9	2.4	2.8	259.0	
I	完形	凝灰質頁岩	11.1	9.9	8.4	3.3	3.0	2.9	436.9	図4-6
I	完形	安山岩	10.5	9.5	7.0	2.1	2.0	1.9	208.5	
I	完形	安山岩	8.9	8.2	4.7	2.2	1.6	1.9	122.8	
I	完形	頁岩	8.1	7.2	7.4	2.5	3.2	2.5	227.4	
I	完形	砂岩	8.9	8.1	6.1	2.8	2.8	2.6	154.6	
I	完形	凝灰岩	8.6	8.1	8.1	2.1	1.9	2.5	187.4	
I	完形	凝灰岩●	9.2	8.6	7.0	2.3	2.3	2.3	187.5	
I	完形	安山岩	9.4	8.7	6.3	2.3	1.9	1.9	183.2	

I	完形	安山岩	11.0	9.8	5.7	1.8	2.2	2.0	140.3	図4-4
I	完形	安山岩●	9.3	8.5	7.3	2.8	2.3	2.0	233.7	
I	完形	安山岩	8.8	7.9	7.4	1.8	1.7	2.6	149.1	
I	完形	頁岩	11.2	10.3	8.0	2.9	2.1	2.1	321.0	
I	完形	安山岩	8.8	7.8	7.5	1.6	2.2	2.3	143.4	
I	完形	凝灰質砂岩	9.2	8.5	6.0	1.8	1.8	2.7	146.9	
I	完形	砂岩	7.1	6.6	7.2	1.7	1.8	2.2	113.3	
I	完形	凝灰岩	7.8	7.2	6.3	2.4	2.0	2.2	120.8	
I	完形	凝灰岩	11.7	9.7	9.3	2.4	3.1	2.1	223.7	
I	完形	凝灰岩	7.1	6.6	6.6	2.7	1.9	1.3	149.7	
		最大値	11.7	10.3	9.8	3.3	3.8	4.0	436.9	
	I類	最小値	5.7	4.9	4.7	1.0	0.4	1.3	42.9	
		平均値	8.6	7.8	6.9	2.1	2.2	2.3	170.2	
II	完形	安山岩	7.4	6.3	8.2	1.5	2.9	2.7	111.2	図4-7
II	完形	安山岩	5.8	4.8	9.0	1.5	2.1	1.9	103.1	
II	完形	流紋岩●	7.1	6.5	8.5	1.7	2.4	1.6	83.0	
		最大値	7.4	6.5	9.0	1.7	2.9	2.7	111.2	
	II類	最小値	5.8	4.8	8.2	1.5	2.1	1.6	83.0	
		平均値	6.8	5.9	8.6	1.6	2.5	2.1	99.1	
III	完形	流紋岩	11.5	10.2	8.8	3.0	a2.9 c5.4	b3.0 d5.0	249.1	図4-10
III	完形	凝灰岩●	8.2	7.3	5.8	1.5	a1.5 c2.6	b1.7 d2.4	93.8	図4-9
III	ほぼ完形	凝灰質頁岩	11.3	10.1	8.3	3.0	a- c3.1	b2.6 d3.1	351.3	
III	完形	安山岩●	8.3	7.0	7.8	2.0	a1.3 c2.0	b1.7 d1.8	120.2	
		最大値	11.5	10.2	8.8	3.0	a2.9 c5.4	b3.0 d5.0	351.3	
	III類	最小値	8.2	7.0	5.8	1.5	a1.3 c2.0	b1.7 d1.8	93.8	
		平均値	9.8	8.7	7.7	2.4	a1.9 c3.3	b2.3 d3.1	203.6	
全体		平均値	8.6	7.8	7.0	2.1	2.2	2.3	168.9	

本貝塚出土礫石錘の平均重量は168.9gである²⁾。縄文時代において確実に漁網錘と考えられる切目石錘・有溝石錘にくらべて非常に重い。上記の編物用錘具の群別では、第2・3群の重なる領域に位置している。各種のカゴ類、コモ、スノコの類いが製作対象になったことが推定される。

形態別にみれば、I類の平均重量は167.9gである。I類が9割を占める構成であることを考えれば、全体の平均重量と大差がないのは当然である。また、想定されるタテ糸の間隔を勘案すれば、I類のように礫をタテ長に用いることも編みの作業に適しているであろう。この点もI類が数量的に卓越している理由であると考えられる。

対してヨコ長の形態であるII類の平均重量は99.1gとやや軽く、III類は203.6gとやや重い。両類とも例数がすくないため、これが本貝塚の傾向を示しているのかどうかは慎重にならざるを得ない。しかし、いずれもI類の重量分布に重なることを考えれば、多数を占めるI類の補助として用いられたことを示している。もじり編みをおこなう際、特に強く締める必要のある両端はやや重い錘を使うことはよくおこなわれている。平均重量がやや重いIII類は長・短軸ともに打ち欠きがみられる形態である。このような形態の差異と使用方法にどのような関係があったのかは今後の課題であるが、この種の課題を明確にするためにも計測方法の統一は必要であろう。

V おわりに

角田コレクション中の角間崎貝塚資料には自然遺物は含まれていなかった。小牧実繁博士が発掘した蜆貝と、宇田川浩一氏が採集したマガイの下顎骨 (Udagawa 2002) といった、断片的な報告例しかない。日本海側の貴重な縄文前期貝塚として、詳細な調査が今後おこなわれることを期待したい。礫石錘の機能について漁網錘・編物用の錘具説どちらをとるにせよ、縄文早期の北日本に礫石錘を多く出土する遺跡が多く、本貝塚は時期的にそれより新しいものの、地理的にはそれらに連なる遺跡と言える。縄文前期後半には静岡県御前崎町星の糞遺跡 (渡辺編 1999) でも礫石錘が多量に出土しているように、しばしばこのような石器組成を示す遺跡がみられることに対する考察が今後とも必要であろう。そのための基礎的作業として、礫石錘の重量測定の徹底と、計測方法統一の必要性を再度強調したい。

謝 辞

本稿作成にあたり、その機会を賜るとともに種々ご教示いただいた渡辺誠名古屋大学名誉教授、礫石錘の石質を鑑定していただいた名古屋大学年代測定総合研究センター鈴木和博教授、主要土器片の編年的位置等についてご教示いただいた富樫泰時氏に御礼申し上げます。

註

- 1) 角田コレクション紹介 1・2 は雑誌『古代文化』誌上, 同 3・4 は本館報告上においておこなった。福島県矢細工遺跡出土のスタレ状圧痕について紹介した「5」は『古代文化』に投稿中である。
- 2) 表 1 中の各最大・最小・平均値はカッコがついていない数値を集計した。重量については、遺存状態が「ほぼ完形」の資料は「完形」扱いで平均値の集計に反映されている。

引用文献目録 (アルファベット順)

- 今村啓爾 (1999) 縄文の実像を求めて。
- 伊藤禎樹・篠田通弘 (1982) 美濃徳山村の切目石錘 (越美山系をめぐって) —『徳山村の歴史を語る会』の活動より②—, 岐阜史学, **76**, 6-30.
- 小牧実繁 (1926a) 日本海沿岸石器時代遺跡の地理学的考察 (上), 史林, **11-1**, 81-97.
—— (1926b) 日本海沿岸石器時代遺跡の地理学的考察 (下), 史林, **11-2**, 52-60.
- 松岡達郎・中田清彦・横山英介 (1977) 礫石錘考—礫石錘から網漁具を再現するひとつの試みとして—, 考古学研究, **24-1**, 73-82.
- 武藤一郎 (1922) 羽後国男鹿半島角間崎貝塚研究報告, 人類学雑誌, **37-1・2・3**, 39-46.
- 中尾篤志 (2002) 中・四国地方における縄文時代の漁網錘, 往還する考古学—近江貝塚研究会論集 1—, 43-52.
- 角田文衛 (1939) 羽後角間崎遺跡の土器, 史林, **24-3**, 130-139.
- Udagawa Koichi (2002) An Analysis of Shells that are Collection in the Akita Prefectural Museum —Mainly about Shells Collected from Arayahama Shellmound—, 貝塚研究, **7**, 29-34.
- 渡辺 誠 (1981) 編物用錘具としての自然石の研究, 名古屋大学文学部論集—史学—, **27**, 1-46.
—— 編 (1985) 阿曾田遺跡発掘調査報告書。
—— 編 (1999) 星の糞遺跡発掘調査報告書。

(2006年10月25日受付, 2006年11月20日受理)